

そのメロディに魅せられて♪

音楽物語 窓ぎわのトットちゃん

黒柳徹子 F9ク11225 篠崎ほか所蔵

黒柳徹子さんが自らの幼少期について綴った「窓ぎわのトットちゃん」をご存知だろうか。昨年10月、42年ぶりに続編が出版、12月にアニメーション映画が公開され、久しぶりに読み返した方も、それをきっかけで知った方もいるかもしれない。初めて私が読んだのは小学生の頃。今も印象に残っているのは、いわさきちひろさんの挿絵と「山のものと海のものを必ず入れる」という校長先生が決めたお弁当のルール。

黒柳徹子さんは多くの方に読まれていることを大変喜んでおり、読者の数だけある世界観を崩したくない、大切にしたい

と考えていた。

そんな中でできあがった「音楽物語」とはどういうものか、聴いてみた。オペラやミュージカルともバックミュージック+朗読とも違う。語りの部分は本の中からテーマを抜粋し、簡潔にまとめられている。合間に入れられたオーケストラの演奏は、主に情景やその時の気持ちを表現しているが、かといって説明的過ぎず、受け手が自由に想像を膨らます余地を残している。本や映画とはまた違った「窓ぎわのトットちゃん」をぜひ楽しんでほしい。

スタッフのセレクション!

もじもじ探偵団

雪 朱里著 グラフィック社 727ユ 篠崎ほか所蔵

私たちは毎日たくさんの「文字」を目にしています。身近なものだけでも新聞、ナンバープレート、電光掲示板、お札など挙げたらキリがありません。この本に出てくる「もじもじ探偵団」では、街のあちこちや身のまわり、くらしのなかで見かける「文字」のデザインがいつ、どこで、だれによってつくられたか、あるいは、その文字がどんなところで使われているのかを専門家に聞き込みをし、調査しています。特に興味を惹かれたのは、眼科健診で必ず見る視力表の

文字（記号？）のお話です。

オレンジの表紙にヒグチユウコさんのイラストがおしゃれな本。会話形式で写真も豊富なので、「文字」が苦手な方も、ぜひ、気になる「文字」の秘密から読んでみてはいかがでしょうか。



編集後記

今年は辰年。体を鍛えて、竜のように強くなりたいです。(風雲ふわふわ丸)／今年は自転車であちこち行くぞ。(ぱるめりん)／さよならだけが人生だ。今年こそ、うまい酒が飲みたい。(たてじま)／今年は迷わず進みたい。(すずの木)／最近友人と全く連絡を取っていません。今年は一緒に遊べると良いなあ。(卯月)

編集・発行：江戸川区篠崎図書館
住所：〒133-0061
江戸川区篠崎町7-20-19

しのざき文化プラザ内
TEL:03-3670-9102
[しのざき文化プラザHP]内篠崎図書館ページ
<https://www.shinozaki-bunkaplaza.com/library/>

▶X(旧ツイッター)やつてます!



図書館報 ぷらっつ★篠崎

80号／2024年1月1日発行（季刊）



篠崎図書館館長が
感じたことなどを記します。

認知症の母と暮らしています。1年以上前から週2回デイサービスに通っているのですが、そのことを全く覚えてくれません。毎週、「今日は出かけるから仕度してね」「どこに行くの?」「運動するところ」「一人で行くの?」「お迎えが来るから大丈夫」という会話が繰り返されます。帰ってきてから「楽しかった?」と尋ねても「どこ行ったっけ?」と記憶が定着しません。それでも現場では楽しく過ごしているらしく、

トレーナーの方々は、周りの利用者の方と楽しそうに談笑しながら運動していたと仰います。記憶には残らなくても楽しい経験をすることはプラスであると考え、私にもできることはやろうと、一緒においしいものを食べに行ったり、お散歩に連れ出したりしています。一緒に楽しく過ごす日々が一日でも長く続いてくれることを、今はただ祈るばかりです。

イベント報告

篠崎図書館では、映画会や講演会など様々なイベントを毎月開催しています。今回はその内容の一部をご紹介します。これからも色々な催しを行う予定です。ぜひお楽しみに!

11月25日(土)に篠崎図書館主催トークショー『暮らしの手帖』編集長に聞く「日々を大切に暮らすということ」を開催しました。雑誌『暮らしの手帖』編集長の北川史織さんをお招きし、『暮らしの手帖』のつくりかたや同社の歴史、現代の私たち一人ひとりが、自分の生活を大切に生きるためのヒントなどについて語っていただきました。

『暮らしの手帖』は、戦後間もない1948年、「もう二度と戦争を起こさないために、一人ひとりが暮らしを大切にする世の中にしたい」という理念のもとに創刊されました。その特徴のひとつは徹底した実証主義。商品テストに始まり、今でも社内キッチンでの「試作」を経て料理記事ができあがっています。「エプロンメモ」などの暮らしの知恵も実際に試してから載せているのだそうです。そして、広告をとらないこと。それは、すみずみまで自分の手で整えたもので雑誌をつくりたいという花森安治の美学でもあります。やはり、スポンサーを気にして書きたい事が書けなくなるのは避けたいと言います。「書くことに制限がないのはなんて自由なのだろう。この自由は読者の方にお金を払って支えていただいているもの」と、それを守っていく責任の大きさを感じていらっしゃるようです。読者参加型の雑誌であることも大きな特徴のひとつ。「この雑誌を読む人は考える人である」と花森安治は信じていました」と北川さん。読者の投稿を大切にしている『暮らしの手帖』。かつて、書店には売れないのではないかと言われた1世紀96号1冊まるごとの特集「戦争中の暮らしの記録」(1968年)はふたを開けてみたら売れ行きが良く書籍化するほどに。最近編んだ「コロナ下の暮らしの記録」にも多くの読者からの投稿があり、選ぶのに苦労したそうです。

お忙しい北川さんですが、ご自身の暮らしは?との問いに雑誌をつくっていくうちに、料理などできることが増えていて、それが自分を豊かにしてくれるとのこと。実際に自分たちでつくってみるということが多い同誌ならではのかもしれません。「他人との比較ではなく自分で満足できる暮らしをおくりたい、私の場合は夜ごはんに好きなものをつくっておいしくいただければ、明日も元気に働こうという気持ちになれる」そうです。図書館の思い出についても語っていただきました。本が友達だったという子供時代、主に移動図書館で沢山の本を読んでいたそうです。「本は私にとって何かへの入口。仕事の入口でもあり、暮らしの入口でもある」と言います。

最後に「暮らし」と『暮らしの手帖』について。「暮らしというものは、こうすれば幸せになるというのではなくて、一人一人が言葉を見つけ、手を使って営んでいくもの。『暮らしの手帖』がそのための一助になれば……。これからも実証主義を実践し、愚直につくっていききたい」と締めくくられました。



『暮らしの手帖』編集長の北川史織さん



波多野館長と対談形式で行いました。

友達

その存在に助けられ、励まされ、でも悩まされたりもして……。今回のテーマは「友達」
様々な友達にまつわる本、ご紹介します。



画像なし

文豪たちの友情

石井 千湖著
立東舎
910イ
篠崎ほか所蔵

文豪たちの友情は濃密だ。仲が良すぎて恋仲かと疑われたり、想いが強すぎて愛憎入り乱れていたり……。各々が活動している刊行物の書評を通して、お互いをリスペクトしあっているのも面白い。良くも悪くも、それぞれの友情が人生に深く食い込んでいることがわかる一冊。



女友だちの賞味期限

ジェニー・オフィルほか編著
系井 恵訳
プレジデント社
934オ
篠崎ほか所蔵

友人を失った記憶について語る女性達。別れる理由はそれぞれでも、一度離れ始めた距離はもう戻らないという点で一致している。そうか、あなたも小さな棘が刺さったままなんだね……。でも、というよりだからこそ、前を向いて歩いているよね、私たち。そう声をかけたくなる。



千年鬼

西條 奈加著
徳間書店
BFサ
篠崎所蔵

幼い弟の最期を知ったことで、心に「鬼の芽」を生じさせた少女。小鬼は友達になった少女を宿業から救うため、千年に渡る旅を始めます。物語に登場する「小鬼」と「少女」は、どこまでも純粋で真っ直ぐです。こんなにも澄み切った友情が存在するのかと衝撃を覚えました。



マドンナのテーブル (『恋愛未満』所収)

篠田 節子著
光文社
Fシ
篠崎ほか所蔵

男女の友情は成立するのか？ それもお互いに家庭のある身で。美佳は、夫が事あるごとに、会社の仲間たちと出掛けることに不満がある。そこには必ずある一人の女がいて、友達だから、戦友だからと言われても到底納得できないのだ。男の世界と女の世界、見ている基準の違いが興味深い。



カズサビーチ

山本 一カ著
新潮文庫
BFヤ
篠崎所蔵

ペリー来航の8年前。クーパー船長率いる米国捕鯨船が海難事故に遭った日本人22人を救助し、鎖国中の日本に送り届けた実話を題材にした物語。日米の船乗り達の言葉の壁を越えた温かい交流が描かれています。クーパー船長の器の大きさに心打たれました。



レニーとマーゴで100歳

マリアンヌ・クローニン著
村松 潔訳
新潮社
933ク
篠崎ほか所蔵

治療が望めない終末期の少女レニーは17歳。83歳のマーゴと、自分たちが生きた100年分の人生を絵に描いて残すことに決めた。2人は「ターミナル」に立ち、それぞれの人生へ旅立っていく。生きるということを再確認できた作品でした。



文豪、社長になる

門井 慶喜著
文藝春秋
F力
篠崎ほか所蔵

早逝した親友を悼み芥川賞と直木賞を創設した菊池寛。機嫌が悪いと「くちきかん」なんて言われていますが、情に厚く、自分を裏切った社員でさえクビにするのを嫌がります。苦労があっても、多くの仲間に関わられて雑誌をつくるのは楽しかったんだろうと感じました。



蛇行する月

桜木 紫乃著
双葉社
Fサ
篠崎ほか所蔵

親子ほど年の離れた男と駆け落ちし、極貧の生活を「しあわせ」と言う順子。傍から見たら幸せそうには見えないのに、友人たちは彼女のその真っ直ぐな思いに引寄せられる。順子に関わる6人の女性の、心の機微が秀逸に描かれた作品。幸せの価値観は人それぞれだなどと改めて感じました。



一心同体だった

山内 マリコ著
光文社
Fヤ
篠崎ほか所蔵

女の子たちとそれを取り巻く周辺は、ときに残酷で容赦がない……。自信とプライドなんか木っ端みじんに砕け散る。そんな最低な世界でも友達がいた。90年代を生きた女の子たちが10歳から40歳になるまでを、リレーのように繋いだ友情のお話です。「ミサンガ」とか流行っていたなー。自分も10代だった頃を思い出しました。



泥棒と若殿 (『山本周五郎中短篇秀作選集2』所収)

山本 周五郎著
小学館
Fヤ2
篠崎ほか所蔵

若殿・成信は家督争いで廃屋に幽閉され、人生に絶望していた。何も知らずに屋敷に入った泥棒・伝九郎が、空腹の成信に食事を作ったことから始まった共同生活。成信は伝九郎との何気ない生活の中で立ち直っていく。二人の会話が微笑ましく、伝九郎の優しさにほっこりしました。